

VI 母体ウイルス感染による胎児 異常発生予防に関する研究

東京大学医科学研究所

吉 野 亀 三 郎

ウイルス感染が胎児に及ぼす影響に就いては、風疹による奇形発生が報告されて以来いろいろな他のウイルス感染に就いても調査されているが、風疹の場合のようにはっきりと妊娠3ヶ月までの母体感染が危険であるというような目安が立っていないし、また果して風疹に匹敵するような危険度のウイルス感染が有るか否か、あるいは風疹以上に激しい胎児感染を起して流産の因を成す場合が有るか否か、もし有るとしたならばどのようなウイルスが妊娠何ヶ月までに母体感染したときに如何なる胎児の危険が有りうるか、という点に就いてはわれわれは系統的な知識を持っていない。したがって、先ずもっとも高い危険度の予測されるウイルスに就いて、その母体感染が胎児に及ぼす影響および産道感染の危険度の実体を把握し、それに基づいて予防措置の対策を研究することが望まれる。

以上のうちすでに或る程度の危険率の判っているもの、すなわち妊婦の風疹感染と出産時の陰部ヘルペス症による産道感染に対しては急速に有効な予防措置が取られなければならない。そして他のウイルス感染症に就いては恐らく危険度が高率と思われるところの肝炎ウイルス・サイトメガロウイルス・ヘルペスウイルスに就いて、その胎児に対する影響の実体を詳しく調べるのが先ず重要課題であることは言を俟たない。したがってわが班の研究もこの2つの方向に進められた。

先ず第1の方向、すなわち既知の危険の予防として風疹の問題であるが、すでにわが国でも生ワクチンが開発され一般に施行の段階になっているが、大きな問題はワクチンウイルスそのものが野生ウイルス同様に胎児に危険性が有りうるため妊婦には使用できないこと、接種ワクチンウイルスの親返り変異でかえって風疹の流行を招来するのではないかという危惧が消えないことである。この点太田原らはモルモットに対する抗体惹起力をマーカーとして諸ワクチン株ウイルスの再分離株に就き親返り変異のないことを証明したがこの点はさらに実験を追加して確認することが必要と考えられる。

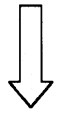
次に陰部ヘルペス症による産道感染の予防であるが、これは診断さえ確実迅速であれば帝王切開出産その他で避けられるので、その予防は一に診断法の改良にかゝっていたが、吉野らのグループによって大巾な診断法の改良が行なわれ、ほぼ100%近い診断率をウイルス分離というもっとも確実な方法で挙げ得たので、今後はこの方法を一般病院検査室等に普及することが望まれる。

第2の方向としては、ヘルペスウイルス・サイトメガロウイルス・肝炎ウイルスの胎児感染の実体調査であるが、これは急速に解決し難い諸種の問題を含んでいる。先ずヘルペスウイルスに就いて言えば、妊婦の感染によって奇形児や早産が有ったという外国の報告は有るが、ウイルス学的確証を伴ったケースはほとんど無いといってよいのが現状である。そこで川名らは産婦人科の立場か

ら、臍帯血のIg M抗体を測定して胎内感染の有無をはっきりさせ、その結果と実際の奇形や早産あるいは流産などを対比分析する立場をとったが、Ig M抗体測定そのものが極めて難しく、母体由来のIgG抗体に邪魔られないで簡単に特異的Ig M抗体を測る方法は、今のところ全くないと言って過言ではない。しかし川名らは抗ヒトIg Gウサギ血清前処理と中和曲線法と抗ヒトIg M抗体後処理をたくみに組合わせて、かなり正確に特異的Ig M抗体を捉えることが出来るようになった。あとはその感度の問題で、この点の今一息の工夫が今後期待される。

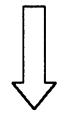
サイトメガロウイルスに就いては中尾らが正確なウイルス学的検索と多数の出産例に就いての解析から、低出生体重児と死産児から高率にウイルスが分離されること、および小児科学的立場から生後3ヶ月以内の先天性奇形とサイトメガロウイルス感染と大きな相関が有ることを示したが、これは極めて重大な報告である。後者の場合その因が胎内感染であるか否かを決定づけるためにはまだいろいろの検査が必要であろうが、前者の低出生体重児に就いては長期追跡調査により、とくに知能に及ぼす影響が調べられる予定である。

肝炎ウイルスに関しては、真弓らの約6000人の妊婦と3810人の対照の調査でいずれも2.3%位のHBs抗原保有があることが判り、その陽性者から出生した児のHBs抗原陽転率は生後6ヶ月で70%に達したことから、明らかに胎内感染が有りうると考えられる例に到った。財満らの調査では、このようなHBs陽性者からの出生児を小児科学的に追跡調査すると、見かけ上はあまり通常と変わらないが肝機能の点で変化が有りうるといふ示唆が与えられているので、その点に注目しつゝ今後この種の追跡を拡げていく予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



ウイルス感染が胎児に及ぼす影響に就いては、風疹による奇形発生が報告されて以来いろいろな他のウイルス感染に就いても調査されているが、風疹の場合のようにはっきりと妊娠3ヶ月までの母体感染が危険であるというような目安が立っていないし、また果して風疹に匹敵するような危険度のウイルス感染が有るか否か、あるいは風疹以上に激しい胎児感染を起して流産の因を成す場合が有るか否か、もし有るとしたならばどのようなウイルスが妊娠何ヶ月までに母体感染したときに如何なる胎児の危険が有りうるか、という点に就いてはわれわれは系統的な知識を持っていない。したがって、先ずもっとも高い危険度の予測されるウイルスに就いて、その母体感染が胎児に及ぼす影響および産道感染の危険度の実体を把握し、それに基づいて予防措置の対策を研究することが望まれる。